

広川泰士

《「BABEL Ordinary Landscapes」より  
静岡県御殿場市 2002年10月》



広川泰士(1950- )  
《「BABEL Ordinary Landscapes」より 静岡県御殿場市 2002年10月》

2002年(2015年プリント)  
インクジェットプリント  
54.0×67.6(60.1×76.1)cm  
平成27年度作者寄贈

建

設途上の高架道路の橋脚の列をとらえたこの写真、どこかで見覚えはないでしょうか。二〇一五年の芥川賞受賞作である羽田圭介の小説『スクラップ・アンド・ビルド』が単行本になった際に、そのカバーの装丁に使われたのが、この写真でした。話題作として刊行時には書店に平積みされていましたから、その時に目にされた方も多いのではないかと思います。

撮影されているのは、二〇一二年に静岡県内で部分開通した新東名高速道路の、建設中の風景です。撮影時には道路部分がまだ載せられておらず、上部に向けてゆるやかに広がった造形も相まって、コンクリートの橋脚の列は、古代遺跡の列柱を想起させます。

世紀の変わり目頃から十数年にわたって、作者広川泰士は、日本各地でこうした大規模な土木工事などによって風景が変容する現場を、大型カメラで丹念に記録してきました。一方で、自然の力がそうした人間の営みをはるかに凌駕するスケールで風景を変えてしまう様子、つまり地震や水害などの災害後の風景にも、並行して広川のレンズは向けられてきました。そうした風景の記録が、東日本大震災を一つの区切りとしてまとめられたのが、『BABEL Ordinary Landscapes』と題された連作です。

連作の中でレンズを向けた風景について、広川は「人は有史以来、創造し、自ら破壊し、また自然によって破壊される事を繰り返して生きて来ました」とした上で、次のように問いかけています。「地球の新参者(人類のこと)引用者」はどの位「創造し、破壊し、破壊される」ことを繰り返すのでしょうか。手に負えないもの迄手にして急いで何処へ向かおうとしているのでしょうか」(写真集『BABEL ORDINARY LANDSCAPES』、赤々舎、二〇一五年)。

さて冒頭に、この写真に見覚えがあるのでは、と書きました。それは前述の通り話題の小説の装丁に使われていたからなのですが、この写真そのものに限らず、こうした風景に既視感があるという意味であれば、誰もが何かしらこれと似た風景を見たことがあるのではないのでしょうか。これはまさに表題どおり今日の「Ordinary(普通の、ありふれた)風景」なのです。そしてそれらが、自然災害によって破壊された風景と並置された時、すなわち地球史的な時間という文脈に置かれた時、この連作は同時代の風景であるという以上の深い射程をもった問いとして私たちの前に現れます。

今回、当館では「BABEL」シリーズより、ここに紹介したイメージを含む二十四点を収蔵しました。

(美術課主任研究員 増田玲)